險にして卑怯極まる手段であり、そして彼等既成政黨が、一回の選擧を經驗する毎に市民の裡に澎湃として浸透しゆく新興無產政黨支持の事實を直視して、その壞滅の墓場の接近を、いかに怖れ戰いたか、また其の頽勢を既倒に回らさんとして、如何に焦慮煩悶したるかは、次表に依つて彰かに想像することが出來やう。

昭和二年九月縣會議員選擧各派得票數（定員三名）

六、五六四（當）	民政	
四、四六一（當）	民憲	
三、五四七（當）	政友	
二、六一二（落）	社會民政黨	（社會民衆黨八幡支部前身）
七三三（全）	統一勞働黨	
四六一（全）	無產中立	
三三一（全）	勞農黨	

昭和三年二月衆議院議員選擧各派八幡市得票數及總得票數（定員五名）

	《八幡市得票》（立候補數）	《總得票》（當選者數）
民政	五、二〇六（三）	三三、〇八七（二）
政友	三、四四六（三）	二二、八四六（一）
民憲	九、七八九（一）	二三、〇一五（一）
社民	五、八四二（一）	一三、九六二（一）
中立	一一五（一）	八九四
統一勞働		一〇二

而も、小選擧區制による打擊は、吾黨に於て最も甚だしい。製鐵所從業員の集團的威力を背景とする吾黨の力は、これに依つて六箇に細分せられたのである。蘇燈

蓋し公新會の意圖もまた、吾黨の擡頭防止に在りた。昭和二年の縣議戰に於ける社會民政黨の敗北は、それが立黨後日淺く、選擧戰の經驗乏しきことと、及び其の支持團体たる勞働組合同志會と研究會との渾然たる融和が欠けてゐた處とに在つた。是等の短處は、しかしながら、日を經るに從つて除去せられ、昭和三年春の衆議戰には、社會民政黨の歷史的發展集團たる社會民衆黨八幡支部は、眞に驚異的進出を成遂げ、今後社會民衆黨の全國的發展と國民の間に於ける社會民主主義の白熱的支持と相俟つて、其の將來は實に恐るべきものあるを示した。一方民憲黨の二回の選擧に於ける勝利は、一つは社會民政黨の失敗に依るものであり、他の一つは、淺原健三君個人の過去の苦闘(?)に對する有權者大衆の『今度一度だけ代議士に出してやれ』といふ九州人特有の義俠心によるものであつて、斷じて、その主義政策に對する大衆の共鳴によるものでなく、從つて。同黨に對しては、公新會も余り大した問題視してゐなかつたのである。況んや、同黨が其の支持母體としての何等の集團をも持たざるに於てをやだ。けれども、民憲黨がその支持團体としての勞働組合なり其他の集團を有たないと云ふことは、小選擧區制設定の打擊を蒙ることの尠きを示すものであつた。

昭和三年二月の衆議戰の難關を見事に克服したる吾黨は、斯くして今また第二の受難に遭逢したのである。

二、臨戰準備

豐富なる金力と古き傳統、情實に據つて固めた六區制の上に起つ公新會の城は登るに難い。更らに、常に吾黨の逆宣傳に狂奔する選擧黨民憲黨の介在することは、此の難戰を屑一層困難多きものとする。

單一選擧區より六箇選擧區への變移は、勢ひ吾支部組織の改變を必然的ならしめた。此の客觀的情勢の變化に照應するため吾支部は、各選擧區毎に分會を組織することの必要を痛感して、昭和三年十二月より之れに着手し、市議戰迫まれる昭和四年三月の末に到つて漸く完成した。

分會組織に當つて、第一區大藏、第四區尾倉及び第五區前田は　製鐵從業員の密集地域にして而も製鐵所職工の官舍地帶であるところから、分會組織といふも、其の實質は黨員の工場單位から地域單位への再編成に止まるもので、大した困難を伴はなかつたが、第二區枝光、第三區中央區、第六區黑崎は、製鐵從業員從つて吾黨々員少く、既成政黨及民憲黨の金城湯池と恃むところであつて甚しき艱難を嘗めねばならなかつた。